令和６年度　東条学園小中学校　学校評価

4・・よくあてはまる　　3・・ややあてはまる　　2・・あまりあてはまらない　　1・・まったくあてはまらない

※生徒・保護者の評価結果は、生徒・保護者アンケート質問項目にもとづいたものです。

評価の観点	評価項目		実　践　目　標　と　成　果	評価		
生きてはたらく学びの向上を図る	基礎基本の確実な定着・学びに向かう力	実践目標	多様な一人一人の児童生徒に応じ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業を工夫する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	学校経営研究発表会に向けた12学級の公開授業づくりを通して、学年間の「学習内容のつながり」と「学び方（他者とどう関わって学びを深めるか）のつながり」を大切にした授業づくりができた。全国学力学習状況調査等や児童生徒の振り返り等において良い変化が得られた。	3.2 (3.2)		
		課題と方策	児童生徒の主体性や全国学力学習状況調査や加東市学力調査などで新たに得られた課題に十分対応できていない。それらを踏まえて来年度の研究を計画していく。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、ペアやグループでの学習も取り入れながら、より深く考えたり意見を交換したりするような協働的な学びの指導をしている。		3.5 (3.5)	3.5 (3.5)
	思考力・判断力・表現力の育成	実践目標	振り返り（メタ認知）の充実を図り、効率的な家庭学習の進め方を支援する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	学校経営研究発表会に向けた12学級の公開授業づくりを通して、「目標とする児童生徒の振り返り」だけでなく、その振り返りをどのようにして得るのか振り返らせ方まで意識することができた。「学習の手引き」を年度途中に再掲して再確認し、児童生徒への指導に生かすことができた。	3.1 (3.1)		
		課題と方策	振り返らせ方については、授業者任せで検討する形になってしまった。振り返らせ方の工夫について検討をすることは今後も必要である。「学習の手引き」をより家庭で活用しやすい物にするためのアイデアや意見を年度末までに集約する。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、授業目標や授業おわりの「振り返り」を行い、前後の授業とつながりのある、わかりやすい授業を工夫している。		3.4 (3.5)	3.4 (3.4)
	ICT活用指導力の向上	実践目標	ICTを活用した「アウトプット（深い学び）」を意識した授業づくりを推進する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	学習したことを深めるためにICT機器を活用し、調べたり自分なりにまとめたりすることができている。発表スライドやアプリを利用することで他者に自分の意見や考えを共有することもできた。また、ICT支援員からアプリの指導を受けながら授業を実践することができた。	3.1 (3.3)		
		課題と方策	ICT機器を活用する場面や使用する教員が限定的であることが課題である。そのため、ICT支援員による講義を計画し、実施することでICT機器を使用できる場を増やしていく。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、ICTを活用して、より楽しく、わかりやすい授業づくりをしている。		3.4 (3.5)	3.3 (3.3)
他者とつながる力を育成する	学級集団づくりの充実	実践目標	エンカウンター等を活用した人間関係づくり、積極的なステージ交流を推進する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	給食部によるハッピーランチ、授業における異学年交流など、学年やステージの枠を超えた関りを持つ機会を設けることができた。また、学級においても道徳やHRの時間に自分の気づきや感じたことを伝えあう活動を通して、自己または他者理解を深めることができた。	3.3 (3.4)		
		課題と方策	ステージ間の交流の場を増やすことができたが、エンカウンター等を活用した関係づくりの企画を行うことができなかった。しかし、部活動の部長副部長を対象にピュアサポート研修を実施し、お互いを支えあう仲間意識について考えている。次年度は、クラス内の人間関係の構築を意識した取り組みを増やしていく。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、異学年交流を積極的に行い、人間関係づくりを重視した指導を行っている。（体育大会・学園祭に向けた取組、縦割り班活動等）		3.4 (3.5)	3.5 (3.5)
	体験活動等の充実	実践目標	学園会の中央委員などリーダーに明確な考えを持たせ、自分の言葉で自信を持って発言、行動できる力を育てる。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	中央委員と正副専門部長が実行委員として、体育大会でのステージ演技や学園会演技の企画・運営を担うことができた。また学園生集会の機会を増やしたり、情報共有ボードを設置したり、自分たちの発言する機会や、考えたことを広めていく機会を増やすことができた。	3.5 (3.7)		
		課題と方策	大きな行事にとどまらず、ステージや学年毎に、日常の学校生活の中でも児童生徒が自主的に活動できるような機会を作っていく。			
		児童生徒・保護者への質問	職員（学校）は、児童生徒に役割を与えたり、事前事後も含めて達成感を味わえたりするような体験活動を実施している。（体育大会、学園祭、加東遺産めぐり、自然学校、「トライやる・ウィーク」、東条の匠　、スキー教室 等）		3.6 (3.6)	3.6 (3.6)
思いやりや寛容の心持ち、互いに高め合う力を育成する	道徳教育の充実	実践目標	教員が協働して、自分の問題として「よく考え」、その考えをより深めていくために級友と「議論する道徳」をめざした授業づくりを推進する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	各学年において、児童・生徒観に基づいた活発な意見交流を行う授業を実施するとともに、児童生徒に多様な視点から話し合い活動をさせることで、自身のより良い生活を考えることができた。	3.3 (3.2)		
		課題と方策	さらに内容を発展させるために、討議形式やICTを活用した意見交換を行うなどの授業案を各教師間で共有し、活用するためのアーカイブをつくる。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、「私たちの道徳」等も活用しながら、級友等と議論することで、豊かな心を育成するための指導をしている。（長期休み中の親子で読もう「こころときめく」や「心かがやく」等含む）		3.4 (3.5)	3.3 (3.4)
	平和学習	実践目標	つなぐ平和学習を通して、平和の尊さ、大切さを考え、行動する力をつけさせる。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	沖縄や広島で学んできたことを下学年に伝えることを通して、平和の尊さや大切さを考えることができた。終戦記念日に自主的にテレビ等で式典を視聴する児童が増えたり、他国の紛争に関するニュースに関心を持ち平和を願う気持ちを高める生徒が増えた。	3.6 (3.5)		
		課題と方策	平和教育を継続していくために、道徳をはじめとした各教科の平和に関連した単元や現在の世界の情勢から、平和の尊さや大切さについて考える機会をつくる。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、平和の尊さ・大切さを考える学習の場を設定し、行動する力を育成している。（ 6年広島校外学習　9年沖縄修学旅行 等）		3.4 (3.5)	3.6 (3.5)

評価の観点	評価項目	実践目標と成果		評価		
健康な心身を育て、安全に対する意識を高める	健康な心身の育成	実践目標	成長を促す指導や予防的な指導等により、教育相談（心のケア）の充実を図る。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	専門部を中心に、あいさつレベルのアンケートや3分前行動コンクールを実施し、その結果を昇降口等に掲示することで、挨拶や時間を守ることへの意識向上につなげることができた。また、学園生による児童生徒への、レジリエンス力を育てることの研修をおこなった。発達段階に応じて、各学年・学年層で連携しながら教育相談等を実施することができた。	3.3 (3.4)		
		課題と方策	今後、あいさつレベルや３分前行動が児童生徒や教師たちにさらに周知され、主体的に行動できる学園生になるよう、振り返り（アンケート等）を実施する必要がある。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、日常生活や教育相談等で、親身になって話を聞いたり相談にのってくれたりしている。（学習計画帳点検、悩みアンケート、日常的な教育相談、教育相談週間、スクールカウンセラーによる相談等）		3.4 (3.4)	3.3 (3.3)
	健康や体力の増進	実践目標	系統的な体幹トレーニングを実施し、子どもの発達段階に応じた体力・運動能力の向上や正しい姿勢を身に付けさせ、けがの予防に努める。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	授業内で昨年度の様子を踏まえて各学年の様子に応じた体幹トレーニングを継続して行うことができた。また、新体力テストに向けた取り組みを専門部中心に実施した。学園生がそれぞれの学年に応じた体力要素の強み・弱みを理解したうえで新体力テストに臨めた。	3.3 (3.4)		
		課題と方策	体力向上に向けた取り組みを児童生徒の様子を見て毎年内容を変更するのではなく、授業者が代わっても系統的・継続的な体幹トレーニングに取り組めるような方法を模索する。また、来年度は体育の授業以外でも実施できる時間を模索して実施する。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、保健体育の授業や部活動、クラブ活動、体幹トレーニングを通して健康や体力の向上のための指導をしている。（体育大会、マラソン大会、陸上大会、駅伝大会、スキー教室 等を含む）		3.5 (3.6)	3.4 (3.4)
	危機管理の充実	実践目標	東条地域学校協働本部と連携して通学路の見える化を一層充実させるとともに、危険予測できるなど自らの命を守る能力を身に付けさせる。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	通学路の見える化では東条110番の家が校区内で誰からでも分かるように設置できていた。危険個所点検を実施し、子どもたちと共有することで危険予測を高める機会となっている。従来から実施している自転車教室の実施や登下校での見回り、学期の始めと終わりに行う安全についての講話などを実施できた。	3.3 (3.4)		
		課題と方策	前期課程では、通学班長が「しっかり並ばせて登下校する」意識を高めるために、定期的に繰り返し指導していく。後期課程では、自転車での事故が多いと予測される時期の前に危険予測や命を守るための能力について指導する。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は､交通事故等がないように安全安心を確保するための指導をしている。（交通安全教室、110番の家の設置、ながら見守りステッカー、集会やホームルームの話、PTAによる登下校指導等）		3.5 (3.6)	3.4 (3.4)
心通う集団づくり、積極的な生徒指導を推進する	自己管理能力の向上	実践目標	時間を意識させ、係（当番）活動や清掃活動など与えられた仕事に責任を持たせる。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	ノーチャイムを実施しているなかで、時間の意識をもつことができるようになってきている。また、教師の声かけや学級経営により、当番活動、係活動に積極的に取り組める学園生が多い。	3.1 (3.0)		
		課題と方策	掃除の始まりの時間を守ることができていない学園生がいる。３分前行動コンクールを実施し、学園生に時間を守る意識をつけさせる。また、児童生徒が互いに注意し合たり自治的に声かけしたりするよう、教師が支援していく。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、完全ノーチャイムを実施し、時間を意識して自主的に生活する習慣を指導している。		3.5 (3.6)	3.6 (3.5)
	協働した指導や支援体制の充実	実践目標	SCやSSWを含めた学園生の支援体制【ケース会議や学年（層）会議】を充実させ、福祉・医療機関や警察等と積極的な行動連携を図る。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	教職員・SC・SSWの連携を密にし、助言のもと、チーム学校として学園生への支援につなげることができた。また、児童生徒支援教員による不登校傾向や集団になじめない学園生の個別対応の支援が充実してきた。要支援の児童生徒へは、SC・SSWだけでなく福祉へも行動連携を図ることができた。	3.6 (3.5)		
		課題と方策	早期発見対応（困難になる前の段階）を大切にしていく。そのために、月１回のSC・SSWとの情報共有の場を継続していく。また、要支援の児童生徒の対応については予兆がみえた段階で、ケース会議や学年層会議等を行い、支援体制を早めに整えるとともに、市の福祉課等と情報共有を密にし、行動連携を図りたい。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等と連携を図ることも含め、日々の指導、支援体制を充実させている。（道徳、集会時の話、情報教育講演会、SNSルール等）		3.4 (3.5)	3.3 (3.3)
一人一人の教育的ニーズに応じた適切な特別支援教育を推進する	適切な教育課程の編成	実践目標	通常学級における要支援学園生の支援体制を充実させ、本人・保護者の願いを中心に据えてライフステージに応じた適切な教育課程（教育支援計画等）を編成する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	新年度の早い時期に職員研修（サポート研修）を行い、要支援学園生について共通理解を図り、生徒指導委員会や校内教育支援委員会で、情報交換や支援体制の見直しを行うことができた。サポートファイルを利用し、家庭とも相談して教育支援計画を立てることができた。	3.4 (3.4)		
		課題と方策	来年度の入級者増加に向けて教育環境や個別の支援体制についてなどの課題が見られる。情報交換を行い、支援体制を整えていく。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、児童生徒をよく理解し、「３つのステージのつながり」のある集団をつくろうとしている。（体育大会、学園祭、異学年交流、縦割り活動、学園会活動等）		3.5 (3.5)	3.4 (3.4)
	切れ目のない児童生徒支援	実践目標	加東市発達サポートセンター「はぴあ」との連携や、デリコラ（巡回相談）等を積極的に活用し、きめ細かく適切な学園生支援・家庭支援を行う。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	「はぴあ」と就学相談をして、児童生徒支援の方法を相談した。デリコラは前期３回後期１回行い、早期支援につなげた。新７年になる児童には三者面談に後期コーディネーターが同席したり、体験授業に参加したりして、来年度への目標課題を見つけることができた。	3.5 (3.6)		
		課題と方策	関係機関の助言を職員間で共有し、職員間の情報共有の場を継続することで、切れ目のない支援をしていきたい。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、児童生徒の内面理解に努め、一人一人の特性に応じた支援や指導をしようとしている。（家庭訪問、三者面談、ユニバーサルデザイン、サポートファイル、通級指導等）		3.4 (3.4)	3.3 (3.3)

評価の観点	評価項目	実践目標と成果		評価		
地域に開かれた学校づくりを推進する	地域との連携	実践目標	自治的なPTCA活動を充実させ、学園生の健全育成を中核に、学校と地域が一体となって連携・協力しながら教育活動を行う。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	PTCA活動の企画・運営をPTCA本部や各部会の正副部長が中心となり、主体的に活動が行なえた。特に、学習参観時のマナー改善について、保護者宛文書の作成、参観日当日の見回り活動をＰＴＣＡ主導で実施できた。	3.8 (3.6)		
		課題と方策	各部会の事業内容の見直しやPTCA活動への理解や協力体制づくり等、PTCA運営がより活発に充実したものとなるように方策を進める。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、学校と地域が一体となって連携・協力しながら、教育活動を行っている。（トライやる・ウィーク、東条川疎水学習、PTCAへの組織再編等）			3.5 (3.5)
	地域との協働	実践目標	人材バンクの充実を図り、地域行事やボランティア活動への参画、地域住民の積極的な学校支援などを通して、東条地域の担い手を育む教育を推進する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	天神地区の花植や東条まちづくり協議会主催の東条ミニ文化祭等、様々な地域行事へ児童生徒、保護者、教職員が積極的に参加し地域と一体となった取り組みができた。	3.7 (3.6)		
		課題と方策	人材バンクの充実が進むよう、地域協働本部等とも連携し登録者が増えるような広報活動を進める。また、地域学校協働活動推進委員を核に学校、PTCA、地域が協議を進め連携を強化する。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、地域の人材を活用して、地域行事やボランティア活動への参加を促している。(東条の匠、東条ミニ文化祭ボランティア参加等)		3.3 (3.4)	3.5 (3.4)
	地域への発信	実践目標	地域での作品展示、コスモス【⇒加東市の花】花いっぱい運動を深化させる。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	地域に定着してきた校外展示をより充実させたり、「戸坂の花文字」「地域へのコスモスの種の配布」等の花いっぱい運動をより進めたりして、児童生徒と地域を繋げる取り組みができた。	3.7 (3.7)		
		課題と方策	児童生徒が取り組む活動の情報を迅速かつ丁寧に発信し、地域を挙げて子どもを育てる環境づくりを推進する。また、学園会等を中心に花いっぱい運動のPRチラシを配布する等、取り組みを広げる工夫をする。			
		児童生徒・保護者への質問	教職員（学校）は、地域への作品展示、地域行事やボランティア活動への参加を促している。（校外作品展示、コスモス花いっぱい運動、TOJO花壇づくり等）		3.3 (3.5)	3.5 (3.5)
教職員が心身ともに健康で、働きやすい職場環境づくりを進める	児童生徒と向き合う時間の確保	実践目標	計画的な学年（層）会議、会議資料の事前配付、各資料の整理整頓を確実に実施する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	職員会議のペーパーレス化に取り組み、そこから各種配布物のデータ化を進めることができた。業務改善の担当委員会で、計画的な議論・評価検証ができた。	3.2 (3.2)		
		課題と方策	引き続き教職員への配布物で、データ化できるものとそうでないものの整理を進め、保存フォルダの整理やより効果的な方法を検討していく。			
	ﾜｰｸ･ﾗｲﾌ･ﾊﾞﾗﾝｽの保持	実践目標	週１回（17時）の定時退勤日やノー部活デーの完全実施、計画的な年休等取得（各学期4回目途）により教職員のﾜｰｸ・ﾗｲﾌ・ﾊﾞﾗﾝｽの保持に配慮する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	職員同士で意識し合うことで、定時退勤は定着してきた。長期休業中に偏るが、平均の年休取得は12.9日であり、目標とした12日を越えることができた。ノー部活動も日程変更等を確認し合い、計画的に実施できている。	3.2 (3.1)		
		課題と方策	年休取得は長期休業中に偏る傾向がみられる。年間の取得目標に向けて、教職員相互の協力体制を進めていく。			
	教職員相互の協力･協働	実践目標	円滑なコミュニケーションを図り、教職員相互の協力・協働の職場環境づくりを一層推進する。	教職員	児童生徒	保護者
		成果	教職員が普段から相互にコミュニケーションを取ることで、学習や生活面において１年生から９年生までの効果的なつながりがより明確になり、協働して教育活動を実施することができた。	3.6 (3.5)		
		課題と方策	教職員が主体的に考えをもって、関係者と調整する資質能力が求められる。引き続き全ての教育活動を自分ごととして捉えていく必要がある。			

※（　　）内は昨年度の数値

【児童生徒・保護者 学校生活および家庭生活に関する項目】

	番号	質　　問	児童生徒	保護者
学校生活	18	自分は、明るくさわやかなあいさつをしている。（あいさつアンケートの実施、掲示等）	3.3 (3.3)	2.9 (3.0)
	19	自分は、友達を気遣い、思いやりを持って行動している。	3.5 (3.6)	3.4 (3.3)
	20	自分は、学校や社会のきまりを守っている。	3.5 (3.5)	3.3 (3.3)
	21	自分は、好ましい友達関係があり，楽しく登校している。	3.6 (3.6)	3.4 (3.4)
	22	自分は、意欲的に学習に取り組んでいる。	3.2 (3.3)	3.0 (3.0)
	23	自分は、先生や友達と上手くコミュニケーションをとっている。	3.4 (3.5)	3.2 (3.3)
家庭生活	24	家庭では、あいさつや生活態度などについて教えてくれる。	3.5 (3.5)	3.3 (3.3)
	25	家庭では、学校の話をよくしている。	3.2 (3.3)	3.3 (3.1)
	26	地域の人は、地域全体の子どもに関心を持っていてくれる。	3.5 (3.5)	3.0 (3.0)
	27	地域と家庭は、協力して子どもを育てようとしてくれる。	3.6 (3.6)	2.9 (3.0)

※（　　）内は昨年度の数値